

第146号

平成13年11月

E-mail: © 2001
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ
横浜市緑区中山町 869-9
電話 045-933-0379
FAX 045-931-9202

11回目



MENU

特製ブレンド 380
レモンティー 350
白替りケーキ 300
ぶるせす 無料

アルコールは置いていません

今年もあと1ヶ月でおしまい。景気が悪いせい
が、表の人通りも心なしが少ない感じがする。
かつて、ソフトウェア部門は不況知らずだった
が、今日ではそうは行かない。それにソフト
ウェア開発は、日本の生産性を落としている
「主役」部門の一つである。

さっき、一組の女性の客が出ていって、カウン
ターの奥に2人の客が残った。2人とも初めての
客のようで見覚えがない。“バグ”とかCMM
とか要件管理といった言葉が聞こえてくるから
、ソフトウェアの人には聞かない。様子から
見て、上司と部下という感じではない。どうやら
同じ職場内で、プロセスの改善を進める立場に
あるようで、取り組み方について、意見が分か
れているのかもしれない。でも、組織のSEた
ちが思ったように動いてくれないと云うこと
では、首肯きあっている。

しばらくして、店のドアが開いて、常連の客が
入ってきた。

「いらっしゃい。おや、今日は2回目ですね」
私の方を見て、
「なんか、考えがまとまらなくて」
と云いながら、カウンターの真ん中に座った。
「いつものコーヒー、お願いします」
「はい、分かりました」
と云って私は、早速コーヒーのドリップをセッ
トして準備に取り掛かった。
熱湯を注ぎながら、彼の顔を見て、
「朝から、その調子じゃないの？」
と、言葉をかけて、反応を見ることにした。
「そうなんです。今年の春から、CMMに取り
組むというので、要件管理や変更制御といった
プロセスを定義して、これに沿って作業をする
ように進めてきたんですけど、どうもうまく行
かなくて」
「上手く行かないって、どう行かないの？」
「今も、テスト中なんですけど、バグの修正の
時に勝手にソース修正してしまうもので」
「せっかく作った変更制御プロセスが無視され
ているってわけ？」
「そうなんですよ！」
「そんなところで強調しなくてもいいんだよ。
それより、あなたが彼らの立場だったら、どう
した？」
「どうしたって？」
「ちゃんと変更制御の手続きに従った？」
「うーん、マスター、いやなところを突いてく
るんだから」
「そんなこと言っても、自分でもやらないかも
知らないプロセスに従っているの
はどうかな」
彼は、返事に窮してしまった。
「はい、特製ブレンド！」
と云って、彼の前に入れたてのコーヒーを差し
出した。今日は、知り合いの陶芸家の作品で、
土の感触が活かされたカップを使ってみた。

さっきから、カウンターの奥の2人が、こちら
の話が気になるようで、自分たちの話が止まっ
ている。喫茶店のマスターが、「変更制御」だ
の「プロセス」だのって話をしているのだから
、何者だ！って思うのも無理はないかも。
でも、今は、目の前の客と戦うことにしよう。

「変更制御プロセスが働かない
て、その原因は何？」

「やる気が無いんじゃないの！」
「そんな単純なの？ さっき、自分でも無視す
るかも知れないって思ったんじゃない？」
「いや、そんなことないよ。やはり決めたこと
は実行すべきですよ」

この辺で、カウンターの奥の客と、問題が重
なったのかなと思って、ちらっと2人の様子
を見てみた。案の定、自分たちの問題とダブっ
ているようだ。

「確かに、ルールはあなたが中心になって決め
たとしても、実行するのはあなたではないから
ね」
「そう、私はプロセスを決める役で、実行する
のはエンジニアですからね。実行してくれな
きゃ困るんだよ」
「実行してくれなれば誰が困るの？」
と、これまた生来の意地悪が出たが、カ
ウンター越しに私の顔を見つめている。
「困るのは誰なの？」
と改めて突っ込む。

まったく困った喫茶店のマスターだ。知らない
人が見たら、この店は何だと思っちゃうだろう
な。現に、カウンターの奥の2人は、このやり
取りに呆気に取られている。
「本当に困るのは、あなたではないはず」
「いえ、私が困るんですよ」
「そう、あなたは自分の役割割り果せていない
と上から追及されるから困るんですよ」
「そうですよ！」

「でも、本当に困るのは、変更制御プロセスを
実行“できない”エンジニアだよ。その結
果、修正欠陥が起きるかも知れないという不安
を解決できないまま、いままでも何も変わら
ない手順で、ソースを修正するしかない」
彼は、良く分からないと言う顔をして、恨めし
そうに私を見つめる。
ちょっと難しかったかな。
「もちろん、中には“実行しない”エンジニア
も居るでしょう。でも、本心からそう思ってい
る人は少ないのではないの？。むしろ、“実行
できない”状態ではないの？」
うーん、まだ分かっていない。

少し頭を冷やしてやろうと、カウン
ターの奥の2人に新しい水の入った

グラスを差し出して、
「宜しかったら、話題の中に入りませんか。お
見受けしたところ、初めてのお客さんのよう
ですが、うちはこういう店なんです」
と云って、メニューカードの《プロセス 無
料》というところを指して言った。
カウンターの前の客が、横の2人の方を向い
て、軽く会釈をしながら言った。
「この店のマスターは、少し前までプロセスの
コンサルタントをやっていた人で、僕ら、こ
うやって困ったら相談に来るんです」

「どう、さっきの問題、分かったかね？」
「“実行しない”と“実行できない”の違いで
すよね」

「そう、“実行しない”方は、ちょっと横に置
いておくとして、“実行できない”方は何とか
しなくちゃね。こういう問題は、自分の立場に
固執しては何も解決しない。彼らの立場で
考えてみる必要があるだよ」

「という？」

「なぜ“実行できない”と思う？」
「うーん、そういわれてみると、やる気が無い
というより、どうしていいか分からないとい
う感じがな」

「どうして、バグの修正方法をレビューできな
いの？」

「バグが多いからかな。確かに、今、発生して
いるバグを毎日レビューすることは現実的では
ないかも」

「やっつと、彼らの目線で考えたね」
「正確でなくてもいいけど、どんな原因が多い
か分かる？」

「そうですね、設計漏れというのが多かったと
思います」

「設計漏れね、多分、その設計漏れの半分以上
は要求仕様書に書かれていなかったからでしょ
う。仕様書を書けない人たちには、みな設計漏
れに見えるものだよ」

「そうかも知れません。確かに思い当たる節は
あります」

「バグが多いままでは、変更制御は機能しない
し、要件の変更が多すぎれば、要件管理は機能
しないな」

「CMMでは、いきなり“要件管
理”が出てくるから、こういった勘
違いが多いかも知れないね」

「勘違いって？ 何か取り組み方を間違えた
でしょうか？」

「要求仕様をうまく書くことが出来ることが全
ての始まりだよ。これが無ければ、仕様変更は
頻発するし、仕様漏れなどのバグも防げないか
ら、どちらの制御プロセスも機能しなくなる。
それに見積もりもいい加減になる」

「そうか。要求仕様を上手く書くことの取り組
みと一緒に進める必要があるってこと？」

「そう、むしろ先行するぐらいがいいと思う
よ」

カウンターの奥の2人の方をみて、
「そちらの方も、同じ問題でしょう？」
と、目配せして言った。

要求仕様が上手く書けないままでは、
いかなる取り組みも効果を上げるこ
とはできない。

暁鐘の音

129

かわいそうな人たち

二頭目の狂牛病に罹った牛が発見された。マスコミでは大騒ぎだったが、一般の国民は、別に驚いていないかったのではないだろうか。私も含めて、「やっぱり」というのが正直なところだろう。政府は、全頭検査するから安全だという。確かに今回のことで、検査が有効だったことは証明されたのかもしれない。逆に、これまで狂牛病の牛が素通りしていた可能性が強くなったし、まだ全頭検査を終了していないのだから、確率的には二〇頭前後発見されてもおかしくはない。でも、本当に一〇頭も発見されたら、政府はどうするつもりだろうか。正直に公表するだろうか。

そんな心配をする間もなく、二頭目の発見で、焼き肉店などは、大きな衝撃を受けたのではないだろうか。すでに、倒産したり店じまいしたところも少なくないようだ。彼らには、何の罪もない。まじめに焼き肉を提供して来ただけだ。肉屋さんも、店先には牛肉を出していないところもある。そして影響は豚肉や鳥肉の卸値が高騰するというおまけまでついているから、始末が悪い。

まるで、一年前の雪印のお騒がせ事件で、まじめにやって来た牛乳の宅配業者が、商売をやめざるを得なくなったのと似ている。業績は芳しくないと言っても雪印はまだ残っている。でも、近所の牛乳の販売店は廃業した。

日本の酪農家も、イギリスで狂牛病が多発していることは、ニュースなどを通じて知っていたでしょうが、狂牛病ってどういう病気が、それはどうして感染するのかといったことは、ほとんど(全く)知らされていなかったものと思われる。言い換えれば、彼ら酪農家は、政府(主に農水省)や農協の言っことを、疑うことなく信用していた。そして配達される飼料を、疑うこともなく使っていたものと思われる。

そうして、突然「おまえの牧場にいた牛から狂牛病が検出されたぞ」と言われても、彼らにはどうすることも出来ない。第一、酪農家自身は責任を負えない。テレビの前で、政府や農協(ホクレン)に対して、怒りをぶつける気持ちも分かる。これから、どうやって行けば良いのだろうか、少なくとも今居る牛は商品にはならないだろう。彼ら酪農家は、全く、かわいそうな人たちである。

感染ルートは、本当に輸入の肉骨粉な

のかということも怪しい。テレビでは、誰も肉骨粉を疑っている。だがヨーロッパでは、飼料以外のルートから感染していることも報告されているようだ。それに、北海道では、だいぶ前から羊の海綿病が発生しているし、羊から牛への感染の可能性も、イギリスで報告されていたのではなかったか。もしかすると、日本の研究者たちは、日本ではこの問題で研究できる環境ではないのではないだろうか。だとすると、この人たちがかわいそうな人たちである。

他に、もっとかわいそうな人たちが居る。あるジャーナリストが、情報公開法に基づいて、農水省に海外からの肉骨粉の輸入資料の開示を求めたところ、しばらくして肝心の生産国や数量などの欄を「墨塗り」にした資料が送られてきたと言って、実際にそれをテレビの前に見せていた。これでは、何も分らないと、そのジャーナリストは怒っていたし、番組の司会者も、まるで戦後の教科書みたいだと、怒りまくっていた。

でも考えてみたら、農水省の役人もかわいそうな人たちである。納税者である日本の国民(つまりお客様)に対して、嘘をつき通さなければならぬのだから、彼らも、立場を変えれば、私たちと同じ消費者である。少なくとも、この役人の家族は、間違いなく一般の消費者と同じ立場だろう。その同じ日本の国民に対して、本当のことを示すことが出来ないなんて、なんとかわいそうな人たちだろう。

彼らも、一步役所を出れば、我々と同

じ日本人である(はず)。外国からの開示要求に対して情報を隠すというのであれば、まだ理解も出来る。だが、自分たちのミスによって、多くの日本人が被害を受けている。もしかすると、これが原因でヤコフ病を発病している人もいるかも知れない。日本では、それすらもまともに研究されていないか怪しい。それでも、墨で塗りつぶして、本当のことを隠し通すことを要

今月の一言

「私らが漁師だからって、海のことだけ考えればいいということではなくて、山が荒れると海が荒れるんだということをね、四〇年やって本当に頭の芯からそう思うんですよね」
(飯田常雄：襟裳岬の昆布漁師)

今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言 今月の一言

求されているとすれば、この役人たちの人格としての「個」は、いったいどこにあるのだろうか。

政府は、いい加減に、国民の生命と財産を守ることを使命とする方向に舵を切らないと、こうしたかわいそうな人が、いつまでたっても無くならない。納税者を騙し通さなければならぬとすれば、何と悲しい仕事だろう。

ちで書かれたプログラムは、テストしきれるものではない。結局、欠陥を含んだまま市場に出してしまつことになる。

それでも、問題を解決するためには、テスト部門という職域から外に打って出ようとする。上流の仕組みを研究し、ごみが垂れ流しになっているのを防ぐ方法を考えようとする。ただ、良い仕事が出来なくなつたと嘆くだけである。もっと境界を越えて、問題を解決するために動かなければならない。

バブル期に就職した人たちの中には、一人の仕事の範囲が狭い状態から脱却できない人が少なくない。当時は大量に採用されたために、必要以上に仕事を分担しあつた可能性がある。その結果として狭い範囲での分担に慣れてしまつていないだろうか。待ちの姿勢に慣れてしまつていないだろうか。